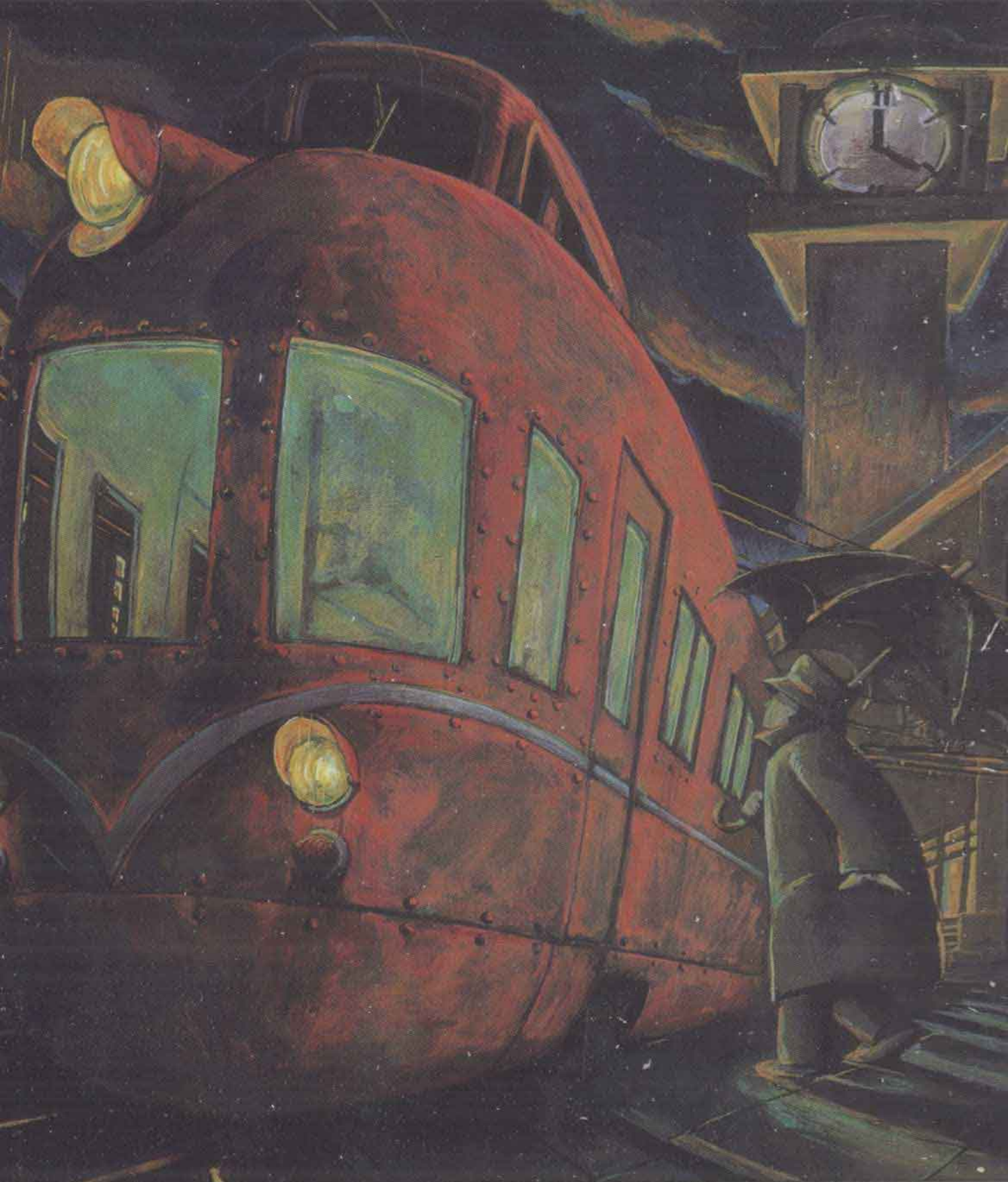




K A P P A N O V E L S

長編推理小説 書下ろし

いん せき

隕石誘拐

宮澤賢治
の迷宮

くじら どう いち ろう
鯨 統一郎



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただきましたら、ありがたく存じます。なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえていただければ幸せに存じます。

東京都文京区音羽一―一六―六

(〒112-8011)

光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理小説 いんせきゆうかい 隕石誘拐

1999年6月30日 初版1刷発行

著者	くじら 鯨	とう 統	いち 一	ろう 郎
発行者	濱	井		武
印刷所	堀	内	印	刷
製本所	ナショナル製本			

発行所 東京都文京区音羽1 株式会社 光文社
振替 00160-3-115347
電話 編集部 03(5395)8169
販売部 03(5395)8112
業務部 03(5395)8125

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替えいたします。

© Tōichirō Kujira 1999

ISBN4-334-07342-5

Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

……… 下ろし

いん せき ゆう かい
隕石誘拐 宮澤賢治
の迷宮

くじら とう いち ろう
鯨 統一郎



カッパ・ノベルス

いさゝかの奇蹟を起す力欲しこの大空に魔はあらざるか

宮沢賢治

本文のカット／佐久間真人

九月一日 水曜日

オツベルかね、そのオツベルは、おれも云おうとしてたんだが、居なくなつたよ。

宮沢賢治『オツベルと象』より



新しい童話のアイデアが浮かんだ。
潜在意識が幻覚化して目に見える。その幻覚は小動物の形をしている。その小動物をペットとして飼う慣らす。

人間は生まれてから経験したあらゆる出来事を記憶しているらしい。たとえば、十歳の誕生日の翌日の朝食に何を食べたか。あるいは過去に読んだあらゆる本のすべての字句。それらを潜在意識は確実に記憶している。ただ、思い出すことはできない。その記憶は脳の奥深くにしまわれて浮かび上がることはない。

もしもその記憶を、しゃべるペットという形で自由に取り出すことができたら……。

中瀬研二は手応えを感じた。

いい作品になりそうな気がする。

タイトルは『幻覚ペット』がいい。幻覚ペットが潜在意識を……。意識をどうする？

記憶が薄れていく。

研二はメモ用紙を捜した。

見つからない。早くメモ用紙を見つけないとせっかくのアイデアを忘れてしまう。

目が覚めた。

天井が見える。

朝だ。今まで寝ていたのだ。

幻覚ペット……。

そうだ。まだアイデアを覚えている。

幸運だ。

今までも、いいアイデアを夢の中で掴んだことは何度かあった。だが、目が覚めるとそのアイデアは掴んだ両手からこぼれ落ちていた。

今は違う。夢の中で浮かんだアイデアを目が覚めたあとも覚えている。

目覚まし時計に手を伸ばす。

午前七時二十七分。

妻と子の布団はすでに畳まれている。

電話の脇にメモ用紙がある。まずそこに走り書き

してあとから創作ノートに転記しよう。

研二は体を起こした。

今日も暑さは続いている。

半袖のパジャマの一番上のボタンが取れたままになっている。妻に「つけておいてくれ」と頼んだのが二カ月前だ。その後も何度か頼んだのだが妻は一向につける気がないらしい。じきに催促するのも億劫になり、そのままになっている。

「どうして判らないのよ！」

二階から妻が子を叱責する声が聞こえてくる。

研二は立ち上がった。襖ふすまを開ける。リビングを通じて階段を上り、書斎兼子ども部屋のドアを開ける。

「やっと起きたの？」

中瀬稔美としみが研二を振り向いて言った。

すでにジーンパンとTシャツに着替えている。

おそらく幼稚園児の母親たちの中でもかなり目立つ美人だろう。稔美の顔は非の打ち所のない完璧な

造作をしていると研二は思う。身長は一六〇センチでスタイルも良く、背中まで伸ばしたストレートヘアと、二十代の親たちにも負けない肌の張り、加えて三十二歳の女性にふさわしい色香をも併せ持っていた。

「何をやってるんだ」

虹野^{こうや}が泣きそうな顔で研二を見つめる。まだパジャマのままだ。

「引き算よ」

「引き算？」

「そう。何度いっても理解できないの」

「ちょっと待てよ稔美。虹野はまだ四歳だぞ」

「もう四歳よ。お友だちで公文^{くもん}に通ってないの虹野だけのよ」

稔美はテレビコマーシャルで羽生善治^{はぶよしはる}名人が公文学習塾出身だと知ってから、子どもを公文に入れたがっていた。だが、中瀬家の経済状態では子どもを学習塾に入れる余裕はない。

羽生名人は公文出身だが、コマーシャルによれば小学二年生から通い始めたはずだ。だったらうちのもそれから始めても遅くはない。

研二はそういつて稔美の学習塾熱に抵抗してきた。できたら一生塾などへは行って欲しくない。

「三引く一は？」

子ども部屋は書斎兼用となっている。

左に親の机があり、稔美のノートパソコンと研二のワープロが置かれている。机に備え付けの本棚には、ビジネス書と童話集が競^せり合^あうように並んでいた。

その右、部屋の中央が虹野の学習机だ。幼稚園のバザーで手に入れた一冊十円の児童書や、学習雑誌「チャレンジ」「楽しい幼稚園」などが、研二お手製の段ボール製本棚に立てられていた。

引出しを挟んだ右端の本棚にも、図書館で借りた本や、おばあちゃんに買ってもらった本、古本屋で購入した童話が詰め込まれている。

「四？」

虹野が真っ赤な顔で答える。

「なんで足すのよ！」

「やめろよ稔美。虹野はまだ四歳だ。引き算を理解する力もないし、その必要もないだろ」

「他の子はみんなできるのよ」

稔美が怒りを押し殺したような声でいう。

「勉強は小学校へ行ってからで充分だよ」

「そんな呑気なことってたら受験競争に乗り遅れるわよ」

「いまから受験競争もないだろう」

「あなたは認識が甘いだよ。ただでさえ、」

「将来の受験制度はどうなってるか判らないよ。大学の価値だって問い直されつつあることだし」

「じゃあ勉強しなくていいっていうの」

「今はいんじゃないか？」

「ただでさえ、虹野は他の子より鈍いのよ」

「ねえママ。三はこれだよ」

虹野が左手の指を三本立てる。

「そうよ」

稔美が期待を込めた顔で答える。

「一はこれだよ」

右手の人差し指を一本立てる。

「そうよ」

虹野は自分の左手と右手を見比べている。

「ねえ、三引く一って、いったいどういうことなの？」

研二は虹野の言葉に吹き出した。

三引く一も理解できないのに、「いったい」などという大人びた副詞を使ったことがおかしかったのだ。

「三から一を引くのよ。答えは？」

「四？」

研二は声を出して笑って虹野の頭を抱いた。
額ひたいに届いた手がかすかな違和感を感じ取る。

「虹野。お前、熱がないか？」

「うん、あるよ」

「ある？」

「さっき計ったわ。三十八度六分よ」

「なんだって」

研二はあらためて虹野の額に手のひらを当てる。
たしかに熱が伝わってくる。

「寝てなきやダメじゃないか」

「子どもは平熱が高いから大丈夫よ」

「まさか幼稚園に行かせるなんて言わないだろう
ね」

「幼稚園は休ませるわよ。幼稚園じゃ引き算教えて
くれないもの」

「家でも休ませろよ」

「幼稚園を休む今日が勉強を教えるチャンスなの
よ」

「勉強のことは幼稚園や学校に任せておけよ。そう
釈迦^{しやかりき}力になることはないだろ。子どもは自由にのび
のび育つのが一番なんだから」

「あなたみたいに理想ばかり言ったら現実に虹
野は他の子にどんどん置いて行かれるのよ」

「かまわないじゃないか。まだ幼稚園なんだ」

「権藤^{ごんどう}翔太^{しょうた}君は自分の名前を漢字で書けるわよ」

「それがどうした。大人になりや誰だって自分の名
前ぐらい書ける」

「虹野は名前を書くどころか自分の家の住所だって
言えないのよ！」

「いいだろ、言えなくたって」

「あなたはなんにも判ってないのよ」

「判ってないのは稔美の方だ！」

研二は声を荒^{あら}らげた。稔美の怒った顔越しに壁の
時計が目に入る。

七時三十九分。

研二は子ども部屋を出て布団が敷いてある畳の部
屋へ向かう。気まずい思いでダンスからワイシャツ
とスーツを出して着替える。

このところ稔美との諍^{いさか}いが多くなっている。結

婚以来七年間、常に夫婦喧嘩はあった。小さなものから、稔美が家を飛び出してしまふような大きなものまで。時には離婚を視野に入れた発言まで飛び出した。でもその度に、稔美の明るさと研二の鷹揚さおうようさで乗り越えてきた。特に虹野が生まれてからの四年間は、お互いに虹野を不幸な目に遭わせたくはないという暗黙の了解事項ができ、喧嘩はしても別れはしないという安心感が感じられた。だが、研二が二年前に会社を辞めてからは、その安心感も信頼できなくなっていた。

研二は半袖のワイシャツと薄いグレーのスラックスを穿くと稔美を呼んだ。

「なに」

稔美が子ども部屋から出てきて後ろ手でドアを閉める。

「朝食の用意をしてくれよ」

「自分でやってよ。いま虹野の勉強みてるんだから」

「ぼくは夫だぞ」

「それが何か特別なことなの？」

「妻だったら夫の食事の用意ぐらいしろよ」

「ねえ。夫だったら夫らしい稼かせぎを持って来てくれる？」

研二は二年前まで東洋火災とうようかさいという一部上場損保会社の社員だった。世間では一流企業と認められている会社であり、求職学生の人気調査でも常にトップクラスにランクされる人気企業でもある。

研二と稔美はその会社で知り合って職場結婚をした。稔美は五年前、妊娠を機に退職した。そして研二は二年前、童話作家になりたいという自分の夢を追うために東洋火災を辞めた。東洋火災での勤務は多忙であり、勤務時間以外に童話を書くという時間が取れなかったのだ。

もちろん稔美は反対したが、研二は自分の信念を曲げなかった。その結果、研二は時間に余裕が持てるアルバイトを捜すことになる。だが、研二に都合

のいい職が簡単に見つかるはずもなく、現在は『とやがさき会館』という結婚式場の便所掃除をしている。稔美には「清掃システムの総合管理」と伝えている。

収入は月十七万円程度。当然研二の収入だけでは生活できず、稔美がパソコンを使ってSOHO（スモールオフィス・ホームオフィス）を開いている。仕事の内容は、ロゴデザイン、チラシ制作、ホームページの作成、など。これでなんとか月八万円は稼いでいる。研二にとってはありがたいことだが、それでも親子三人月二十五万円では苦しい。生活を切りつめなくてはやっていけない。

「あなたあたしが働いているのをいいことに、まともな生活費を渡してくれたことないじゃない」

研二は反論できなかった。研二は収入の全額を稔美に渡したことはない。給与明細も見せたことがない。あまりにも少ない収入の全貌を、稔美に知られなくなかった。もちろん、収入が少ないことはお互

いに判っているが、それが具体的にすることが怖かった。逆に稔美の方は、研二の収入をとことん追及しない「武士の情け」を心得ていた。

「育ち盛りの虹野に肉だって満足に食べさせてやれないのよ。肉だけじゃない。野菜だってそう。いつも半額の札ばかり搜して。たまには思いっきり値段を気にしないで新鮮な野菜を買ってみたいわ」

研二は押し黙る。

「たまには外食もしてみたい。虹野を遊園地に連れて行ってあげたい。でも、みんなダメじゃない。節約節約で息が詰まるわ。あなたが会社を辞めなかったら」

「同じことを何度もいうなよ！」

「いいたいことはもっともっとあるのよ！」

東洋火災を辞めなかったら生活は安定し、おそろしく人並み以上の収入を保証されただろう。だがそのかわり研二は自分の夢をあきらめなければならなかった。東洋火災の社員は朝八時には出勤し、夜八時

まで働くことが普通だ。家に帰ってから資料の作成や保険知識の勉強が、終わることなく控えている。

勤務時間が終わると研二には童話の着想が次々と浮かんでくる。東洋火災に居続けるということは、その心の要求を無視しつづけることを意味する。それは研二にはとてもできないことだった。

「水道料金やガス料金の「引き落とし」できませんでした」っていうハガキはもう見たくないわ。あれ見ると絶望的な気分になるのよ」

「ぼくだって同じだよ」

「じゃあきちんと稼いできてよ。ろくでもない童話ばかり書いてないで」

研二の顔色が変わった。

「ろくでもないだと。ぼくは教室では一番才能があると思われてる」

「だって一銭にもなってないじゃないの。あなたは口だけなのよ」

「あれを見せただろ。ぼくの名前が『ひまわり』の

新人賞の二次予選まで残ってる」

「前にもあったじゃない、何度か予選に残ったこと。でも結局ダメだった。才能があると思ってるの、あなただけなんじゃないの」

「稔美。冷静に考えてみるよ。何度も予選に残ったってことは、それなりの実力はあるということだろ」

「でも、一度も最後まで残らなかったじゃないの」

「今度は大丈夫。賞金は一〇〇万円だ」

「聞きたくないわよそんな話。獲ってから言ってよ。いつも口ばかりで」

研二には自分の才能に対する自信があった。だから口にする。でも受け入れられない。稔美にも、審査員にも。

「家も狭すぎるわ。虹野が大きくなって個人部屋が欲しいっていったらどうするの？」

その頃には少しは金を儲けて広い家に引っ越している。だがそれをいっても「口ばかり」という言

葉が返ってくることは判っている。

「ねえ、もうすぐ九月六日ね」

九月六日……。

その日が二人の結婚記念日であることを研二はころうじて思い出した。

「今度の結婚記念日にはダイヤモンドをプレゼントしてくれない？　それも、今まで誰もつけたことのないような凄いいダイヤモンド」

「誰もつけたことのない？」

「そうよ」

「誰もつけたことのないダイヤモンド……」

研二は考え込んだ。

「どうしたの」

「いや、今いいアイデアが浮かびかけた。ほら、稔美が持っている七色のダイヤモンド。あれがもし本物だったら」

稔美がうつむいて首を強く左右に振った。

「あれはオモチャよ。あなたのそういうところが嫌いや

なの。あたしは真面目よ。ダイヤを買って」

「無理に決まってるだろう。意地の悪いことをいうなよ」

「そう。じゃあ、あたしたちもうおしまいかもね」
稔美はさして思いのこもらない顔で研二を見つめた。

「おい。もう少し優しくなれないのか？」

「あなたこそもう少し強くなつてよ」

虹野が子ども部屋から顔を覗かせる。

「勉強してなさい」

すかさず稔美の声が飛ぶ。

「はい」

虹野は顔を引っ込める。

「あたし二年間一度も新しい洋服買ってないのよ。洋服どころか下着も買ってないわ。どれもみんなボロボロ。それを我慢して着てるの。もうたくさんだわ、こんな惨めな生活」

「もう少し待ってくれよ。必ずなんとかする」

「聞き飽きたわ、そんなセリフ」

「じゃあ他になんて言えばいいんだ」

「知らないわよ。早く仕事に行つて。顔も見たくない」

研二は立ち上がった。

「お前は何でも自分が正しいと思つてる」

「それはあなたよ」

「もう少し夫を信じたらどうだ？」

「あなたはデクノボーよ」

「なんだと」

「全然稼ぎがないじゃない。デクノボーなのよ、あなたは」

「おい！ 言つてはいけないことを言つたな」

「ほんとのこと言つて悪い？」

研二は食卓を平手で叩いた。稔美がその音に耳を塞ぐ。

「もういや。田舎に帰りたい」

稔美の声が涙声になった。両手で顔を覆う。

研二はその場を離れた。ダンスからネクタイを出して締める。仕事にネクタイはいらないが、締めていくことが習慣になっている。無造作に垂らした髪にムースをつけておざなりに櫛を通す。研二はそのまま食事をしないで玄関を出た。

*

午前十一時。

研二との言い争いから三時間近くが過ぎて、稔美はようやく冷静さを取り戻してきた。

（今日はやけにイライラしてた。生理が近いせいかな）

嫌な思いをさせたまま夫を送り出してしまった。

夫を送り出してからは勉強を教える気にもなれず、虹野を寝かしつけた。熱のせいか虹野はすぐに寝息を立てた。そのあとで稔美はテレビを点けて久しぶりにワイドショーを見た。普段の稔美は時間ができ

るとすぐにパソコンに向かうから、ワイドショーを見ることはめったにない。岩手県雫石市近辺でアルツハイマー病が異常発生している。それが今日の最初の話題だった。

（雫石は小岩井農場があるところだわ）

宮沢賢治の愛した小岩井農場。

稔美は亡くなった父親のことを思いだした。

稔美の父親は布施獅子雄ふせししおといって、一種の山師だった。

自らを日蓮にちれんの再来と称して新興宗教まがいのことをやったり、催眠術の見世物を企画したり、柳田やなぎた國男くにおに触発されて東北民俗学に手を染めたりと、金になること、ならないこと、あらゆる分野に興味を抱いていた。

中でも一番熱心だったのが、宮沢賢治みやざわけんじの研究だった。

稔美も父に半ば強制的に賢治を読まされたが、さほど興味が持てなかった。獅子雄は稔美に賢治を強

要することをあきらめた。その獅子雄も、稔美が小学校五年生の時に賢治の研究をぶつとりとやめてしまった。

（なぜ突然やめたんだらう？ 宮沢賢治だけは長続きすると思っていたのに）

稔美がいつも抱いていた疑問だ。

稔美が六年生になったとき、獅子雄は事故で死んだ。

「ママ」

虹野が起きてきた。まだすっきりとしないのか目をこすっている。

「どう？ 熱は」

「すこしあつい」

稔美は虹野の額に手をあてた。

「さっきより熱いみたいね」

稔美は本棚に置かれている薬箱から体温計を取り出す。

「ねえママ」